

私の障害、私の個性

ウェンディ・ローソン著
ニキ・リンコ訳 花風社

繰り返しの動き

- 繰り返しの動きは、喜びを与えてくれる。
- やめさせられたりするのには、大嫌いだった。

色と音

- 色は感情を呼び起こし、夢見心地にさせてくれるが、音は必ずしもそうはいかなかった。
- ある種の音質、ある特定の音程は、ひどい苦痛を引き起こす。

書きことば

- 私にとっては、書きことばの方が、話しことばよりもずっとわかりやすい。

アボリジニの世界

- 人と視線を合わせると、先祖の魂が失われてしまうと信じられているそう。

砂に頭を埋めたダチョウ

- まわりで何が起きているのかなんて、さっぱりわかっていなかった。かといって、親しさや好意はわからないので、優しくされると混乱して、怖くなるのだった。

「友人」として長い付き合い

- <自分の身のまわりで起きることはしっかりわかっているんだ> という感覚を必要としているので、物事を自分の思い通りに動かそうとすることがある。
- 身近な人たちにしてみたら、自分が操られているとか、利用されているかと思えることもあるかも知れない。

ギブ・アンド・テイク

- なかなか高度なテクニックであり、自閉症者にとっては、いつのまにか自然に身に付くなんてことはあり得ない。
- 学習すれば、感謝や配慮、思いやりなどを表すやり方を覚えることはできる。

体を動かす

- おとなしくいすに座っていなければならないときでも、体を前後に揺るのだけは、やめるわけにはいかなかった。床に座っているときは、体を揺すりながら、口の中では、舌で上あごの裏側を強く吸うことを繰り返さずにはいられなかった。

音が大きくなる

- 人が話していると、声が耳に痛いので、逃げたくなることもあった。私はすぐに感覚の負担が限界を越えてしまうので、そうなるともう、人のいる場所に入られなくなってしまうのだった。

触られること

- 人に触られると、自分の中でいろんな感覚がたくさん起こりすぎて、手に負えなくなるからではないかという気がする。
- 人が触ってくれたとなると、こちらもそれなりの反応を返さなくてはならない。

「幻聴」

- まるで頭が胴体からはずれてしまったような気がして、なんとしてでも取り戻したいと感じていたことだ。どこへ行っても、影が後をついてくるように思えた。ずきんをかぶった黒っぽい人影が、もう人生から解放してあげよ、そうすれば苦しみも終わるよと言ってくる。精神科の医者は、この影のことを「幻聴」だと言っていた。

変わる手順

- 新しいやり方が採り入れられたり、手術の手順が一回ごとに違ったりするのは負担だった。
- 私はしょっちゅう、手順を忘れてばかりいた。

友達について

- 一方では友達がほしいと思いながら、でも同時に、拒絶されるのを怖がってました。

こだわりの背景

- 決めなくてはならないことを少しでも減らすため、私はお気に入りの服や食器、決まった手順にしがみついた。それでも、こうした秩序も時にはほころび、役に立たなくなることは避けられない。そんなときは大変な騒ぎになるのだった。

内面の恐怖を和らげる

- 自分を取り戻すには、独り言を言い、同じ場所を行ったり来たりしながら、両手をぱたぱたと振り、何か見慣れた物に意識を集中させようとする。
- 時には、ハミングしたり、静かに歌を歌ったりすることもあった。

映画「ギルバート・グレイブ」

- 自閉症者の若者アーニーは、毎年夏休みになると、家の近くをキャラバンが通るのがうれしくて、驚喜する。
- みんなはキャラバンなんて見飽きていて、おもしろいと思わないのに、アーニーだけは恍惚となっている。

考えを改めるのはとても難しい

- ある状況で一度わくわくしたら、同じ状況では必ずわくわくするし、ある人と会って楽しかったら、その人に会うたび、毎回楽しくなる。
- 恐怖や不安についてももちろん同じ。

強い愛着

- こうなると今度は、その人達の近くにはべったりとくっついていたくなったり、ひっきりなしに抱き締めて欲しいと思うようになった。

他人の身になって考える

- 「他人の身になって考える」ことは、私には今でも難しい。本当に感じられるのは、自分の欲求と自分。外側にあるものは、すべてよくわからないものでしかない。
- 人と接する時は、習慣と型と作戦に頼って動いている。

わがまま

- ここまでになった私でも、まだ、わがままだと思われることはある。こんな人、つきあいきれないと思う人もいるようだ。
- 期待されるとおりに振る舞う 型どおりの人たち、和を乱さない人たち、そんな人たちがばかりで周囲を固めている方が、人は気楽に暮らせるということだろうか。